

保育を通して倉橋惣三を読み解く ～「心もち」の実践的理解～

○佐藤 寛子 上坂元 絵里 高橋 陽子 灰谷 知子 (お茶の水女子大学附属幼稚園)
浜口 順子 (お茶の水女子大学)

I. はじめに

本園では、平成28年度より2年間の計画で、「子どもの内にある感受性を探る」というテーマで研究に取り組んだ。「感受性」という目に見えないものを捉える上で、子どもたちが外の世界に向けて表現している、目に見えることを手がかりにしながら研究を進めた。その過程において、表現の源にある子どもの「心もち」を受けとめていくことの大切さに改めて気づかされ、本園の主事であった倉橋惣三の説く「心もち」について丁寧に考察していく必要性を感じた。

II. 倉橋による「心もち」の記述

『幼児の教育』(1932-05)に収められた巻頭言「ころもち」の中で、倉橋は子どもの心もちを「極めてかすかに、極めて短い」と表現している。また、『就学前教育』(1932)においては、就学前教育法の特長として挙げた8項目の最後「八、心もち」に、「(略)その全体としては心もちが潤っており、心もちが滲んでいなければならぬ。幼児も、そうした心もちの生活をしている(略)」と記している。かすか、短い、潤う、滲むなど、感覚的な表現で心もちを伝えているのはなぜか。文献的方法では理解しきれない倉橋の「心もち」を日々の実践に照らして読み解く方法で考えてみることにした。

III. 実践記録

倉橋の「心もち」の記述を意識におきながら、思い浮かんだ事例をそれぞれの保育者が記録におこしてみた。以下は、T保育者が記したA児(5歳児)との関わりの記録である。

私が遊戯室から戻る時、保健室の前を通りかかると、A児がなんだかそわそわした感じで保健室にいるのが見えた。先ほどまでは、B児と笑いながら本を見ていたのに(どうしたのかな?)と思いのぞき込むと、それに気付いたA児が「Bくん、(どこにいるか)知ってる?」と聞いてきた。「遊戯室で見かけたよ」と言うと、戸惑ったような表情で考え込んでいる様子に見えた。

私は、そのまま保育室に戻ったが、やはりA児のことが気になり、(どうしたものかな…保健室に行ってみようかな)と思い廊下に出た。すると、遊戯室から出てくるのが見え、その後は扉越しに中をのぞき込んだり、扉の前をうろろしているのが見えた。

そこで近づき「Bくん、いたでしょ?」と声をかけた。「いたけど…」と言って、うつむく。しばらくうつむいたままだったので「一緒に遊びたいの?」と尋ねると「保健室にいる時に『遊ぼう』って約束していたのに、(近くに行って)聞いたら、入るなって言われた」と言う。「一緒に、言ってあげようか?」と私が言うが、体が動かず、遊戯室の中に入れない。そこで、手をつなぎ、一緒に遊戯室の敷居をまたいでみた。少し足取りは重かったが、中には入った。でも、そこで止まってしまった。(どうしたものかしら…)、とっていると、A児は「一人で行くからもういい!」と言って私の手をふりほどき、自分でB児に近づいていった。そして、何やらやりとりをし、そのまま一緒に遊び始めた。

IV. 実践記録の分析と考察

T保育者の実践を、その記録の中に見られる「心

もち」を求めて皆で読み解いていった。記録の中で特徴的な表現や、頻繁に用いられている記述に着目しながら、事例の客観的分析を試みた。そのときの状況や思いをT保育者が振り返り、皆で語りあうことで、「心もち」理解を共有しながら研究を進めていった。

(1)「見えた」という表現から伝わる保育者の関わり

記録中に「見え(た)」という表現が4回出てくる。また、「そわそわした」「うろろして」「うつむく」といったA児の動きやかすかな表情の変化を丁寧に記録していることから、保育者が目に見えないことを探ろうと、よく見て関わっていることが窺える。「どうしたのかな」「どうしたものかしら」といった表現も3回程見られるが、このことからA児の心もちがどのようなものであるのかを探りつつ関わろうとする保育者の心もちが伝わってきた。

(2)「一緒に」という表現に込められた保育者の思い

文中に4回出てくる「一緒に」という表現については、それぞれの保育者からいろいろな解釈や思いが語られた。子どもの思いを受けとめる保育のありようは子どもの年齢によらず共通であるが、特に「一緒に言ってあげようか?」という保育者の投げかけは、5歳児12月であることを考えると、「やや幼いのでは?」という意見も出た。T保育者はこのことについて、「もっとストレートに表現できるのよ」というA児に対する思いが強かったと語った。A児は友達に対してやや距離のある関わり方をし、A児の思いが周囲に届かないことが気になっていたという。こうしたT保育者の心もちに触れ、改めて記録を読み返してみると、「一緒に遊びたいの?」という言葉もまた「一緒に遊びたい!って言うといいのよ」という意味で使われていることがわかり、一緒に遊戯室の敷居をまたいでみることで、A児を後押ししようとする関わりが見えてきた。

保育者の手をふりほどき、自分から友達の輪に入り、遊び始めたA児は、友達と一緒にの嬉しさを実感していたにちがいない。

V. 倉橋の「心もち」を読み解く

「心もち」を意識において書かれた記録を読み、語り合う中で、記録の奥にある保育者自身の心もちに触れることになった。そのことは、日々の保育を改めて丁寧に見つめ直す作業にもつながった。

保育者の心もちに触れ、その心もちを通して、私達はA児の心もちに触れることができたように思う。子どもの心もちを、子どもを取り巻く「ひと」「もの」「こと」との関係性の中で見えてくるものなのかもしれない。

言葉で理解し、言葉で説明しようとするとその途端に違ったものになってしまう「心もち」であるが故に、倉橋はあえて、感覚的な表現で「心もち」を伝えているのではないだろうか。保育を通して感じ取る実践的理解を今後も重ねていきたい。